医事・文談　九百四十七　平岸　三八

《正岡子規（36）の続き》その235
子規と漱石（四十四たび続）

久保より江さんについては、『日本女性人名辞典』（一九九八年、日本図書センター刊）に次の如くに記載される。摘記する。

明治17年（一八八四）9月17日～昭和16年（一九四一）5月11日。

明治・大正期の俳人、歌人。愛媛県松山に生まれる。夏目漱石が松山在住時代に下宿した上野家の娘。幼時、漱石や子規に愛され、伯母につれられて、俳席に出ることもよくあった。

明治32年（一八九九）上京して府立第二高等女学校を卒業。

九州大学教授で歌人の久保猪之吉と結婚。夫と共に福岡に移居。「ホトトギス」同人となり、虚子らに学ぶ。

また、服部躬治に和歌を学び、『明星』に作品を発表している。

『より江句文集』、小説・随筆集『嫁ぬすみ』などの著作があると書かれている。

11歳で句会に、末席ながら連なったというのだから、後年、俳人となる素質は既に幼少の頃からあったことになる。

句会というのは、松山の主に小学校教員の集まりの松風会で、子規の指導を受けに来たものである。そのため学校でも、離れにえらい先生が居るというので肩身が広かったとより江は書いている。校長先生はじめ沢山の先生が句会に来られ、用事があって来られぬ時は教員室の窓から手紙や、ことづけを頼まれるのが内心得意であったそうである。

子規は大病後の静養中にも拘らず、句会を催して熱心に指導し、そのほかに散歩など外出もしていたようだ。より江さんの記憶に残っている子規は、ヘルメットにネルの着流し、やや汚れた白縮緬のヘコ帯を、瘠せて段のない腰に落ちそうに巻いた姿だという。神戸での臥床3ヵ月で、臀肉がすっかり落ちていたのであろう。

「ホトトギス」子規居士五十回忌記念（第54巻第12号　昭和26年12月1日発行）に、「ホトトギス五百号史」（柴田宵曲記、髙浜虚子補刪という長文の雑誌で上下二段組、総ページ55ページ）があり、「ホトトギス」毎号の内容の詳しい紹介が載っている。

それによると第16巻第2号（大正元年11月）に、「中の川の思出」という写生文がある。これが久保より江の最初の文章で、以後大正5年1月、全8年1月、全8年9月、全13年11月、全15年7月、全年10月により江の文章が載っているそうである。大正14年12月（第29巻第3号）には、虚子の「嫁ぬすみ序」が載っているが、「嫁ぬすみ」はより江の文集である。

このようにかなり長期にわたり文章を発表しているが、同人として俳句が抜かれて載せられていることは勿論であろう。

現今と異り、句集や文集の出版が必ずしも容易でない時代に、著書を持っていたことは、なかなかの才能の所有者であることを示すものである。

より江の句を尋ねたが、なかなか手に入らない。やっと〈新版〉日本秀句第6巻『大正秀句』（富安風生著、二〇〇〇年一〇月一五日春秋社発行）に見出した。（初版は一九六四年）

この本は、著者が出版社の依頼に応じて執筆したものであるが、かなりの老齢になってから（70歳代後半）のもので、しかも執筆の場所も二転三転し、参考書も少ない状態でのもので、各作家の句も、必ずしも秀句や代表作が取り上げられている訳ではないようである。

従ってより江の句が見出されたといっても、充分な吟味や検討から選ばれたものとは思えない。しかし、より江のある方向を読み取ることはできるであろうし、風生の鑑賞に堪えた句を読むことにも意味はあると思われる。

富安風生（明治一八―昭和五四（一八八五―一九七九））は東大卒業後、逓信省に入り、次官まで勤め上げて退官。以後俳句一筋に生きる。俳句は34歳で福岡為替貯金支局長時代に、吉岡禪寺洞を知り、その道に入る。福岡時代、より江とも面識があった。芸術院賞受賞。